

本県遺族代表 広島慰霊

原爆死没者慰霊碑に祈りをささげる川本司郎さん(手前左)=6日午前10時すぎ、広島市中区の平和記念公園



核なき世界思い強く

72回目の「原爆の日」を迎えた6日の広島。7月の国連で核兵器禁止条約が採択されたことで世界の核兵器廃絶に向けた動きが注視される中、本県遺族代表として平和記念式典に参列した川本司郎さん(80)は静岡市清水区は犠牲者に祈りをささげ、核なき世界の実現に向けた思いを一層強くした。

(社会部・大沼雄大)

「静岡の人も 関心持って」

5人兄弟の四男として広島市で育った川本さんは8歳の時、爆心地から2・3キロで被爆した。爆風とほこりで真っ暗な視界が徐々に開けてくると、風景は一変していた。周りの家々は衝撃で押しつぶされていた。

手足にやけどを負う中、建物疎開の作業中に爆心地近くで被爆した父貫一さんと会うと、一部は骨が見えるほど全身を熱線で焼かれていた。父は終戦から4日後に51歳で亡くなった。

「周りほどの家族もそんな状態だった」。父の死を悲しむ余裕はなかったが、記憶は今でも生々しく残っている。両親と長男、三男の兄の名前は、広島原爆死没者名簿に記されている。

県原水爆被害者の会会長を務める川本さんは、核兵器廃絶を目指す活動に汗を流してきた。「核の傘」に守られている日本や核保有国が参加していない核兵器禁止条約は、実効性が課題とされるが「核保有国と非核保有国の橋渡しをできるのは原爆の悲惨さを知る日本。じきに水爆実験で焼津の漁船『第五福竜丸』が被爆した経験を持つ静岡の人たちにも、改めて関心を持ってもらいたい」と語った。